# 臼井吉見論(一)

腰原哲朗

地域文化をになった雑誌の一つに「月刊・信濃ジャーナル」がある。その昭和五十年一月号で、臼井は浅間温泉の詩人高橋玄一郎と対談している。「大河小説「安曇野」完結を記念して」の新春対談というのである。

二人の話は松本中学校時代にさかのぼっての文学談義が主となり、現状におよぶ。年齢は玄一郎が一つ上、二人は大正期の中学時代に文学の色彩濃い「校友」誌にかかわる。

この「校友」の発刊は明治二八年で、一時期中断もあったが松本中学校の機関雑誌の性格をもちつつ現在の松本深志高校へと継承されている[1]。臼井吉見が在学した大正期は、自治論議や白樺派自由主義といった時代背景をうけて、生徒の自主的編集により文学ジャンルを中心に盛んに発行された。

臼井吉見には編集者、批評家、小説家の三つの顔があるとされる[2]。そうした顔の原型はすでに若い青春時代に形成されたとみられるが、その周辺を検証することで、教育問題をも関連させて文学の問題を私考するものである。

## 第一の青春

松本中学入学時の風景を、演劇の松本克平（本名赤沢義巳）は次のように回想している。

> 学科と体格検査が二日にわたって行われ、数日後合格が本名で発表された。雨天体操場に張り出された合格者をトップから見て行ったが、私の名前は無い。それで途中でやめてこんどはビリから見た。あった。ビリから二番目に赤沢義巳とあるではないか。合格者一八一名だから私は一八〇番でパスしたわけであ

る[3]。

学校は当時松本城の中にあった。現在の松本城下の公園は校庭で、野球もここでおこなわれ、アカシヤの枝を振って応援したり、昼休みは城の階段が遊び場になった。

北組四十数人は背丈の順に並ばされ、席について出欠を取られた。担任の教師は一人ずつ姓名を呼びあげて顔と照らし合わせた。私はアだからまっ先に呼ばれ「君の名は義巳（よしみ）と呼ぶんだね」と念を押された。そのうちウスイヨシミという名が呼ばれた。臼井吉見である。私は思わずニヤリとした。私と同じヨシミがもう一人いたからである。

同級生には教育者と歌人が多く、上級生に唯物論研究の永田広志、河野重弘がおり、唐木順三、詩人の高橋玄一郎がいた—と松本克平は回想を続ける。

長野県下全域から志願者が集まった松本中学校の入学は難関だった。そのため大正五年度の入試時には本荘校長が「特別入試検査」をおこない物議をかもした。三・六倍という一般入試とは別に、各小学校から推薦された二一名を無試験入学させたからである。そのなかに本荘校長の長男がいたこともあり物議をかもした。その結果、校長排斥事件に進展しストライキ激増の要因となる。もっとも推薦された二一名のなかには永田広志ほか後年社会で活躍する人材がふくまれていた。

さらに松本克平の追憶は次のようだ。

私と同じ汽車通学の臼井吉見はすでに詩人であった。彼によって私は西条八十の詩を暗誦し、室生犀星の「ボンタンの歌」を愛誦するようになった。やがて彼は校友会雑誌の委員になり腕を振るった。

彼の自伝によれば四年の時に姦通小説を校友会雑誌に発表したと伝えられているが、なぜか私には印象が薄い。彼は古田晁（あきら）、高橋茂、鈴木信恵と冬は一緒に下宿した。

引用が長くなったが、当時の学生の動きを再確認する意味からである。成績順に合格発表をするなど、戦後のプライバシーを重視する風潮や学校施設との差は著しい。通学の不便差も著しい。

二人は安曇野の隣あった村の出身だから、当時開通したばかりの軽便鉄道、信濃大町と松本をむすぶ信鉄（しんてつ）と呼ばれた中古客車で通学した。男女共学ではないから汽車通学で遠目に異性を意識しつつ北アルプスの風景を眺めながら。時には山中にたちのぼる炭焼の煙をみつめながら。

臼井吉見の姦通小説というのは「ある山小屋での出来事」という三〇枚余りの短編。松本克平が記す四年ではなく中学五年のとき「校友会」（大正一二年一月67号）に発表した作品である。炭焼小屋や鳥屋でカスミアミによる野鳥猟から帰った主人公がヤクザな弟と女房が不倫していると思いこみ猟銃をぶっ放すという話である。

処女作だから印象が強かったらしく、「山近ければ山を忘る」[4]というエッセイで、この短編は空想であること、教師から注意をうけたが「しかし、うまくかけている」と言われたと追想し「安曇野」にもこの短編をそう入している。小説のほかに童謡も手がけた（63号）。

この短編発表の前年、忘れられない童謡がもう一点あった。同じ「校友」（大正十一年十月66号）に出した「芒のかげから」という童謡である。その冒頭の一節を引く。

芒のかげから　見る船は
夕焼け積んで　やってくる

芒のかげから　見る船は
涙をつんで　やってくる

なかなかの秀作である。ところが一級下の人物が剽窃して一流雑誌に載せたので、ビックリしたのは当の臼井吉見、自分とは別人の後輩の名前だったからだ。本屋で立ち読み中に見つけて「息もとまるほど、びっくりした」（『ほたるぶくろ』あとがき）と記し、「信濃ジャーナル」の対談でも話題にしている。

その見ひらき二ページで北原白秋とならんで絵入りで載った雑誌は、久保田正文[5]が指摘するように児童雑誌「金の船」から転じた「金の星」であろう。大正一一年六月号から「金の星」と改めたこの雑誌は、「赤い鳥」とならんで野口雨情らを中心に児童文学を代表していた。本居長世の曲譜「七つの子」「青い眼の人形」といった童謡の流行にあわせ、詩というより詞への試みが盛んになった。そういう時代風潮に、いち早く対応した結果であろう。なにやら臼井吉見のジャーナリスティックな萌芽をうかがわせる。

この「校友」誌で編集など活躍した人は高橋玄一郎のほかに、のち一緒に「鳰の巣」という同人誌を出す田中富次郎（信州大学教授で藤村研究家）がいる。「校友」70号の編輯発行人は田中富次郎で編輯委員は10人である。この号に田中富次郎は「キャラメル」という小品を発表している。

巻頭論文には吉江孤雁のほか先輩の寄稿で飾るなど、大正期は文芸活動の充実した時期であった。こうした全盛期をもたらしたのは、自主的に動いた群像のかげで、指導する教師がいたからである。伊那出身の国語、漢文の教師であった矢沢邦彦である。

矢沢邦彦が、いわゆる文学青年といえる群像に影響を与え創作へ走らせたことは、臼井吉見や高橋玄一郎の年譜にも記されるほどだ。

矢沢邦彦は六尺近い体格で破顔大笑して作文・修身を教え、文芸部長として生徒の自治活動を促した。また熱心な日蓮信者でもあったから、多感な若者に感化をおよぼした。農本主義者となる日蓮信者の和合恒男などもその一人で、松本中学にはキリスト教など宗教的空気が色濃く漂ったことは、高橋玄一郎「異説古城中学」に描かれている。

生徒の自主的な自治活動を支えたものに、相談会という組織があった。矯風会とならんで、相談会長を選挙により選出、校長は辞令を発して任命するかたちをとった。臼井吉見は相談会副会長を大正十一年に、和合恒男は大正七年にそれぞれつとめている。臼井吉見の政治問題への評論、和合恒男の長野県議会への進出など、文学だけに片よらない活動の萌芽をみる思いがする。

こうしたやゝ早熟といえる群像からすこし距離をおいていたとみられるのが、高橋玄一郎と同年齢の青柳優である。臼井吉見と同郷で松本中学を経て昭和五年早大英文科卒業、詩から転じて評論家として活躍する。いくつかの同人誌に参加し第三次「早稲田文学」の編集に関与した。「その評論はじみだが現象把握が的確で前進的であり、重厚な迫力がある人がらが人間的魅力であった」[6]とされている。

青柳優との恋愛については、相手であった石垣綾子自身が記しているが、アメリカへ渡って画家の石垣栄太郎と結婚してしまう、と

いった経緯や、義兄に優と同じ早大英文科出身で博学の文芸評論家加藤朝鳥がいたこと、実家が上高地でホテルを経営していて文学者を招いたりしたこと、といった環境が「重厚な人がら」を形成したものか、評論集も地味である。青柳優については稿を改めて検討したいが、ここでは『文学の真実』（昭和16赤塚書房）を例にみる。

この評論集の跋で浅見淵は青柳優について、辛抱強く理性的で「信州人気質を多分に持っている」と人がらを評し、評論そのものについては「極力評論におのれの流露した感情が流れ込むことを避けている」ので、もっと強く自己主張してもいいのでは、と記している。

たしかに時評的で、戦争文学、満州文学などに言及し積極的に提言する論調を避けている。しかし大政翼賛会の岸田国士を意識しながら、こうした時代を背景に「反映・批評・協力」する文学の現象を注視して、文学の自律モラルを希求する姿勢がうかがえる。「作家は時代を超越することは困難」としながらも、文学と政治の論争をふまえ、「文学と時代の統一」を主張する。

こうした地味で常識的な論調は、松本中学の早熟な群像とちがって晩成型とのかかわりを考えるモチーフを捨てがたい。

すなわち、教師が生徒に与える感化、影響のありかた、生徒の自主性を保障することと教師が指導介入すべき限度といった課題である。もっと言えば、影響を与えた場合の教師の責任問題である、となれば酷になるが、たとえば思想面での影響で学生運動になり、満州開拓への勧めといった時代を想起すれば、教育者の戦争責任になり道義的責任といった面を軽視するわけにはいかないだろう。

むろん一方では、影響をうけた側の自己責任だという論点がありうる。その場合でも成人した若者なり、高い能力を有する人物なり大学生などの場合ならともかく、十代の生徒だったらどう考えるべきか、自己責任というには酷であろう。

幸いなことに臼井吉見はもとより、高橋玄一郎は詩の世界で、松本克平は演劇の世界で影響をバネにして業績をあげ、自分の生涯自分の世界を完結させた。松本克平の大著『日本社会主義演劇史』は親友古田晁の進言で実現したし、『私の古本大学』にみられるように蔵書家としても知られ、民間学に生きた文化人として記憶される。再三にわたり検挙された苦難の時期に小型手帖に細字で記した七冊の「日記」を私は求めて東京での古書入札会に十万円強でのぞんだが、落札できなかった。松本克平に注目する人の多い証であろう。

高橋玄一郎の場合も、地方に定住しながら『高橋玄一郎文学全集』五巻が野間宏と山室静のつよい推薦で刊行されたことは、特筆すべきことであろう。

こうしたケースをひきあいにだすのは、文学にかかわって志とげられず、実人生の面でも幸から無縁だった歴史を想起するからである。有力な賞をとってさえ沈黙した作家たちの死屍の山は知られるところだ。なにも文学にかぎらないとはいえ、画業など実学とはちがう虚学ともいうべき分野への勧めは、ロマンチズムだけでは解決できない。

それならば教育は感化影響をおよぼさず、無色透明がいいのか。無思想、中立で没個性的な教育がいいのか。そうした側面からいえば臼井吉見の場合は、周辺の影響から距離をおく姿勢が強かったと思われる。

こうした周辺の影響から距離をおいて、独自の方向にすすむ一群もあった。自殺者である。一群というと強すぎるが、この時期何人

かの自殺生徒が出て、衝撃をあたえたようすが高橋玄一郎『異説古城中学』に描かれ、一つのモチーフをなしているほどである。その一例が八百清顕という生徒の場合である。

唐木順三は、東尋坊の岸壁から十二月三十一日身を投げた清顕をしのんで、同じ大晦日岩頭に立ち三十年の歳月をへて記すのである。

八百は松本中学では私より二年下であった。年は三つ下であった。そのころ特別の秀才は尋常五年で受験できた。八百は五年から東京府立二中に入った。父が宮内省の役人で、木曽の営林署に転勤した折に松本中学二年に転校、私は四年であった。私の親戚が同じ営林署にいたのでその紹介で私の下宿に八百はきた。色白のまるまるとした顔。最年少の弱さがあった[7]。

色白の清顕が自殺したのは昭和六年日本大学ドイツ語講師の時で二五歳だったから、直接中学時代の影響とはいえないが、教育や思想が若者の自殺を止められなかった例証となろう。清顕は東大独文科に入り、上諏訪で教師をしていた唐木順三の下宿に二度来て、敗北主義の芥川を超えよ、汝自らを超えよと情熱的に語る。その縁で唐木順三は昭和四年に書いた「芥川龍之介論」が雑誌「思想」に載る。昭和二年の芥川の自殺は宮本顕治「敗北の文学」を生んだように、清顕は三木清の『唯物史観と現代の意識』を順三に示し、新時代へむけて力強く生きるよう説得したはずであった。

唐木順三あての清顕の手紙に託されていた「飛躍」という題の詩に関心を寄せて高橋玄一郎も引用している。つぎのような一文だ。

地下に下れ！地下に下れ！地殻に触れよ　地殻に摑め　地殻を胸一杯に抱いて天空い飛べ　天涯を仰げ！天涯を仰ぐ者の胸は地殻であれ

いかにも死への情熱を予感させ、複輝石安山岩の柱状節理の絶壁である東尋坊という死の場所まで予告しているような清顕の詩的断片である。とにかく松本中学時代、キリスト教青年会という光塩会に入り、大学時代は評判になっていたデイルタイの生の哲学やマルキシズムに関心を示し、シラーを卒業論文に選んだ八百清顕の青春は、自殺によって幕をおろしたのである。松本中学出身では、山本飼山の自殺などが先例としてあり、なにも特別な現象ではないが、教育というより時代そのものがもたらす影響の強さを思わせる。

教育原理といったものがあるとすれば、それは死ぬナの一語に収れんされると私は考えるが、そういう意味からすれば、自殺を止められない点で教育は無力である。教育に普遍的な指導方法はどうもないらしく、個対個がむきあう具体的な影響関係が重要におもわれる。

それでは臼井吉見は時代思潮にどう対したか。松本克平や高橋玄一郎、永田広志がかたむいたマルキシズムには距離をおいたし、反戦徴兵拒否に対しても常識的な民族感情からも懐疑的で自分も徴兵に応じたし、教師として国語教育にあたったときも、文芸思潮などとからめた文学教育よりも、語学教育そのものに重点をおくことを主張し実践した。こうした臼井吉見の性向を唐木順三は「臼井には特定のイデオロギイはない。特定のイデオロギイのまた複雑広範な現実を切り捨てることにおいて成立していると、臼井には見えたであろう。」[9]といっている。そうした観点からいえば、大宅壮一のいう無思想の思想[10]ということになり、自由主義の色彩を濃くする。

けれども何らの感化もおよぼさない教育（教師）ならば無用だ、たんなる知識の伝達者であって存在価値に乏しい。さらに個として

の教育から、組織としての近代教育という時代背景を考えるとき、臼井吉見の視線は示唆に富む。

## 教育への視線

臼井吉見が教育問題について多く言及しているなかで、例をひくと次のような文言がある。

民主主義は日本の教育にとって不可欠の条件ではあるが、それはあくまで条件であって、それだけでは教育は行われないということ、加藤（周一）氏の言葉を用いれば「ワク」を「中身」と錯覚しないこと[11]

この認識が教育のイロハ、文化のイロハだと強調する。

抵抗と拒絶と選択のないところに、自主性の自覚はありようがない。自主性の自覚のないところには、さいわい、絶望もない[12]。

こうした視点から臼井吉見は、教育にかんするルポルタージュを試みている。

教育界での組織上の問題をみるルポが京都市立旭ヶ丘中学校の場合である。平和教育の理念で実践した教師が、偏向教育批判となり免職にいたる事件で、その最中の取材である。

このルポは「旭ヶ丘の白虎隊」（文芸春秋）として発表され、かなりの批難をあびた[13]。平和教育のスローガンを観念的に義務教育に応じて配慮に欠ける、といった私見があり「僕は旭ヶ丘中学の教育がもう少し筋道の通った進歩的なものであってほしいと切望するものだ」で結ばれていたからである。唯物論の立場で進歩的だと考えている教組側に、筋道を通せとか、観念的だとかの言葉が刺激的だったから批難をあびた。

こうしたルポの表現以上に、当時の社会状況が非難を大きくした。教育二法案による国家統制が強まる季節だったからである。教組批判は、文部省や保守勢力の思うつぼだったから、反動的な評論家というわけで、脅迫めいた便りをどっさり受けとった。多くの論調が中立で、教育委員会と学校側の喧嘩両成敗の風潮のなかでは、大胆なルポだった。

教育二法案に反対だった臼井吉見も、この問題で生徒が影響をうける面を重視したこと、事実は事実として、強気を助け弱きをくじくことにあろうと、記すべきことは記す、という姿勢でのぞんだルポであった。

しかし白虎隊というヤユ的な表題や、発表が大雑誌だった点、筆者の姿勢を曲解する要因であったことも事実であろう。

もう一つの例が高知県で、全国に先がけて紀元節をやり話題となった小学校のルポである。戦後すぐに二十六歳で校長になった山村の小学校長が教組と対立するなかで、君が代を斉唱し、人間天皇を宣言した詔書を読むのだという。時代離れした話でマスコミに騒がれる一九五六（昭31）年にルポは書かれた。

臼井吉見ルポによれば、この小学校長は私欲がなく、素朴な情熱で教育にあたっているので、村人の支持が厚く、だから紀元節式典が穏便におこなわれているのだという。ようするに、思想、労働観、実践は古風で、教組からみると反動にちがいないが、教組側もこの校長に対抗できる内部からの教育力の充実が急務だ、と臼井吉見は強調している。

巨視的に教育の方向や権利を見きわめる組織的な力と、微視的に

は地味で日常的な個と個の教育上の接触がおこなわれるべき個人的な力との緊張関係が示されている例に思われる。臼井吉見の視野は、両極にそそがれてはいるが、論調は後者の個の教育論に傾いているようだ。それを示すのが、山びこ学校に対する高い評価である。山形県の山びこ学校は、信州でいえば島々から上高地へゆく途中あたりの風景のなかにあるという。戸数三百の街道に沿った細長い村落、そこへ山形師範を出たばかりの無着先生がやってきて、表現力のない生徒を一人残らずひきあげて二年たらずの期間に『山びこ学校』の文集を生み評判となった。その作文は、文学作品としての綴方指導とちがい、どこまでも教育の手段、出発としてなされた結果だ。体系的な教育方法論から生まれたというより、一個の教師の人間力のよるものだ、というのがルポの要点である。宿直室や教室でみかけた、無着先生と子どもたちとの即応的な触れあいも紹介しつつ、教育の原点は個と個の接点にあると言いたいようである。

しかし個と個の接触による影響で覚醒する行方にも臼井ルポは視線をそそぐ。すなわち冷害など厳しい風土から生じやすい北上山系のニヒルな心情に、社会の矛盾を覚醒した知性の芽が加わって、将来を不安にするのではないか。

ここまで考えると、秘密の告知の可否めぐる一般論のように難問となる。とりわけ教育は眠ることではなく覚醒を前提とするのだから、教育による影響はさけるわけにはいかない。したがって影響の時期、度合、倫理的な責任などが考慮されなければならない。一例を言えば現実の矛盾に気づかせ、社会変革を説いて影響を与える場合である。

一時期、高校生にまでおよんだ若者の政治運動での教唆に近い場合も、背後に倫理的で、道義的な責任感情が流れるべきであろう。扇動した結果、相手が不幸になっても関係ないということはありえない。新興宗教などの場合も同様であろう。

これがもう戦前の軍国主義下の教育ともなれば、責任のとりようがない。極論すれば、そうした社会状況下では、なにもしない教育がせめて最善ということになるだろう。逆に変革を必要とする状況下でなにもしないのでは、教育の意味がない。明治維新期を想起するだけで、教育の重要性は明白だ。まことに教育の慎重さと決断を思うだけでも、教育はおそろしい仕事である。

（付記）

久保田正文（註5）が記するように、臼井吉見の著書は机に積みあげると二メーターくらいになるかもしれない。けれども同じ文章があちこちにダブルかたちで収録されているケースが多い。本稿ではまだ書誌学の整理がないままの記述となっている。そのため臼井吉見の引用文の初出は略してある。

（註）

(1)『長野県松本中学校　長野県松本深志高等学校　九十年誌』『深志百年』
(2) 中村稔『文学館感傷紀行』
(3) 松本克平『八月に乾杯』『来し方の記』（信毎）
(4) 臼井吉見『どんぐりのへた』『ほたるぶくろ』そのほか『残雪抄』に「幼き日の山やま」と題して一部を収める
(5) 久保田正文『信州の近代文学』（東栄蔵編）
(6) 川副国基『日本近代文学大辞典』
(7) 唐木順三全集（九）収「東尋坊」
(8) 高橋玄一郎『めぐり会った人びと』
(9) 唐木順三「臼井吉見のこと」（昭42・7）

(10) 大宅壮一「無思想の人・宣言」（昭30・5）
(11) 臼井吉見『あたりまえのこと』「教育を知らぬ教育者」
(12) 同「進歩的文化人」
(13) 臼井吉見『炉ばた談義』「旭ヶ丘より」ほか